さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題をふだん着のままで紹介するシリーズ

太田フレックス高校を訪ねて

６月２５日（月）猛暑の中、太田フレックス高等学校を訪ねました。校門を入ると一面芝生の校庭が目に優しく、奥には緑の木々の丘があってほっとします。敷地は旧下田島城（岩松城）の址、尾島女子高校から太田西女子高校の歴史を経て、平成１７年４月に新しく生まれ変わったユニークな高等学校です。

太田フレックス高等学校の「学校案内」は呼びかけています。「一人一人の生活スタイルを大切に　新しい柔軟な学習システムで　夢に向かってチャレンジしてみませんか」

フレックス高校とは

ホームページで、竹澤敦校長先生は、次のように述べておられます。

「本校は、Ⅰ部（午前部）Ⅱ部（午後部）Ⅲ部（夜間部）定時制課程と通信制課程を擁する二学期制単位制高等学校です。校名に謂う『フレックス』とは、英語の『フレキシブル』に由来しています。文字どおり『柔軟で』『しなやかに』という意味で、生徒一人ひとりの個性に寄り添い、各自の学ぼうとする意思を尊重するという教育理念を表わしています。

ですから本校では自分自身の興味関心や進路目標に合わせて、学びの道筋を形作れるのです。学びたい科目を選択し、自分のための『時間表』を作り、自分だけの学校生活をデザインできるのです。

本校には学年制はありません。少人数授業が基本です。制服もありません。時と所

と状況に見合った、自覚ある『立ち居振る舞い』は当然求められますが、一人ひとりの自由度の幅は限りなく広いといえます。これはまさに『フレックス』の名に相応しいものです。

学習に軸足を置いて、しっかりと卒業要件である７４単位を修得すれば、定時制とはいえ三カ年間で卒業することもできます。得意科目を生かして上級学校を目指す人、自分のペースで主体的に学習したい人、仕事と学習を両立させたい人、自宅に居ながらにして学習したい人など、さまざまな要望に応じられるのが本校です。

『生涯学び続けることができる生徒の育成』、これは本校の教育目標です。さまざまな可能性を開花させ、現実のものとしていく現場が本校にはあるのです。」

校内で行き交う生徒が笑顔で挨拶をしてくれましたが、確かに服装や髪形はそれぞれ自由でみんな伸び伸びしています。思わず「ああ、服装検査がなくていいなあ」とかつて服装検査で生徒とぎくしゃくした現役時代の苦い思い出が蘇りました。

学年制がないということは、クラスもありません。その代わり、「ゼミ」というのがあって、生徒は興味・関心に合わせてゼミの先生（担任）を選び、HR 活動と総合的な学習の時間に活動します。

例えば今年度のゼミには、理科工作、World Travel、コミュニケーションを楽しもう、将棋またはオセロ、心と身体の健康(以上、初級Ⅰ部)、演劇、将棋＆オセロ、英文和訳、折り紙＆マラソン、空手道(以上、初級Ⅱ部)などがあり、各ゼミは 16 人程度の生徒数です。

※ⅠⅡ部では最終学年に相当する生徒は、進路学習主体の「卒業年次ゼミ」に所属します。

コミュニケーション英語の授業

さて今日は２時間目、齋藤理一郎先生の英語の授業参観です。教室に入ると、生徒は思い思いの座席について談笑していました。座席も自由のようです。この学校は少人数授業が基本ですから教室は小さめ、２８人がやっと入れるくらいでしょうか。

２時間目の授業は「CEⅠ＝コミュニケーション英語Ⅰ①発展」、１０時５０分から１２時２０分まで、なんと９０分授業です。授業の登録者は２３名で、クラスの６割が外国ルーツの生徒。不登校経験者が多く、生徒の出席も常ではないので、日々の授業は「出たとこ勝負」。今日は１７名が出席しています。

Lesson4
Kawaii and Japanese Pop Culture

教科書の最初に、各パートのテーマが日本語で紹介されていました。

パート１：「カワイイ」という日本語は、海外でどのように理解されているのでしょうか。

パート２：日本のカワイイキャラクターは、世界でどのように活躍しているのでしょうか。

パート３：海外の人々は、どのような点から日本を理解しているのでしょうか。

今日は、パート３を学習します。その前に、パート２の復習を兼ねて、先生の後をついてみんなで読みました。良く声が出ている！高校生になると声が出ないものですが、気負わず普通に声が出ています。

さらに要点を Q&A で整理した後、パート３に進みました。

黒板の右端にこれまでの各パートのキーワードを板書。

Part1: kawaii ⇒ Part2: Kitty
⇒ Part3: culture

なるほど、こういう流れなんですね。

まず Reading です。これが面白い！先生が調子よくマーカーペンで空き缶をたたいて区切りながら読んでいきます。“Toi, Toi, Toi”と三回叩くのは、ドイツ語で幸せを呼び込むおまじないだとか。リズミカルな英語です。生徒はプリントの英文に／で区切りを入れながら、先生の後についてコーラスリーディング。読みにくい所にアンダーラインを引いて、もう一度読みます。難しい所の読みを練習した後に「みんなだけで読んで」と、かなりしつこい。手を変え品を変え、授業で 10 回は読ませるそうです。

次に読解です。外国ルーツの生徒も多いので「和訳」はしません。「Comprehension」と称して、文章の構造を読ませています。

ポイントになる部分について問答を入れながら説明していきます。この生徒とのやり取りがまた面白い。先生の言葉を借りれば「食うか食われるか」。生徒はリラックスした様子で、聞いているのか聞いていないのか？と思いきや、あちこちから答えが返ってくるから、ちゃんと聞いているんですね。時には、生徒の間を聞いてまわりますから、居眠りはできなさそう。

パート３は、海外の人々が、Japan Expo などを通じてカワイイキャラクターだけでなく、ポップカルチャーから、さらに日本の伝統的な文化にも理解を広げていくことを述べています。

（紙面の都合で、途中のやりとりは割愛します。）

「じゃあね、Japanese traditional culture、どんなものがある？」と先生。「和食」「うん、例えば？」と先生。「すし」「天ぷら」。

「和食の他には？」…「着物来て踊るやつ」「盆踊り」「歌舞伎」「祭り」などなど。中には「ジャニーズ」「AKB」という答えも。これには先生も「自分の趣味を押し付けないでよ」と応酬。ついに「宝塚」というのも飛び出しました。「うーん、そうだねえ、宝塚は、pop と traditional の間なのかねえ。」…いやはや、こうなると日本文化論ですねえ。

こんな風に、齋藤先生の土俵に生徒がの

ってくれるんですから、羨ましい！

それにしても、90 分終わってみると、私たち取材陣 3 人、どっと疲れが出ました。

生徒の感想は…

インタビューの時間がとれなかったので、小さな用紙に感想・意見を自由に書いてもらいました。

「とっても楽しいです。ｖｅｒｙ　ｖｅｒｙ　ｆｕｎ！　90 分眠くならないで受けられてます。」

「ほかの授業よりとても楽しいです！！」
「90 分間が短く感じる」
「最近（初？）のほうはおもしろいけど、あとからつまんない」
「分かりやすい授業で本当に良かった。本当に楽しい授業です。」
「楽しいです。中学の先生みたいにおこりっぽくないので好きです。」
「楽しいです。色々なことを話してくれます。授業時間が長くて大変だけど、あっという間におわります。」
「最高」（用紙一杯に大きく）
「わかりやすくおしえてくれてわかりやすいです。のってくれるところがいいと思います。」
「他の授業にくらべればたのしい。いつも元気にいるから。」
「先生の授業はとてもおもしろく、とてもわかりやすい。」
「楽しい。ノリが良い。おもしろい。」

高校英語で『学び直し』をモノにする

取材前日 6 月 24 日、齋藤先生のレポートを聞く機会がありました。(新英語教育研究会群馬支部月例会）小見出しはそのタイトルです。おそらく太田フレックス高校の生徒たちの多くは英語が苦手だったのではないでしょうか。

齋藤先生は、その現実をリアルに押さえて次のように述べています。「英語初学者（小・中学校生）と『学び直し高校生』は違う。学び直し高校生は、挫折を経験して、それでも取り組む緊張感（ヒヤヒヤ）があるので、『初めて』と同じとアプローチでは失敗の繰り返しになる。『基礎・基本』をおさえる大切さと学習者の『プライド』のバランス」が肝要です。そこで、生徒に「学び直し」をうながすためのアレコレを先生独特の方法（by Ｒ１６０）で工夫して編み出し積み上げているのです。

そのアレコレの内容をタイトルだけ、紹介してみます。

1　アルファベット自信ない…⇒アルファベットで遊ぼう
2　英単語が読めません！⇒音とつづりのイケてる関係
　※音とつづりを関連づけられると…
3　単語のつづり覚えられません⇒戦慄のつづりテスト
4　ペアワークとか、怖いよお～⇒自己紹介を使い回す
　※自己紹介の例→友人紹介へ
5　英文なんて、読めないよ⇒声に出して読みたい教科書
　※音読のヴァリエーション
6　英語でスピーチとか、ムリムリ⇒じゃあ、スピーチやろうか！
　※Ｍｙ　Favorite を紹介しよう
7　テストじゃ点が取れないね⇒わかったよ、取らせてやるよ

と、こんな風に「齋藤マジック」に乗せられて？生徒は「学び直し」のステップを歩んでいくのでしょう。

私たちが参観した生徒たちは、今、この土台づくりの最中なのだと思います。結構、ハードに鍛えているようでしたが、「楽しい」「わかりやすい」と言ってついてきています。やがてこの生徒たちがペアワークをこなし、スピーチで“My Favorite”を語るようになるのでしょう。楽しみです。

齋藤先生が授業の前後や校内で、自然体で生徒に声をかけおしゃべりを楽しんでいる姿を見かけました。生徒が「ノリがいい」「近い」と言ってくれる齋藤先生、こうやって生徒に対して常に心も体も「開かれている」からなのでしょう。

学び方を学ぶ時間
「自分の英語学習について気づいたこと」

昨年度末、生徒たちが一年間の学びを振り返って記述しています。例えば…

・英文を読んだり書いたりできるようになった。
・書けなかった英単語が書けるようになった。
・分からないことが分かるようになって楽しかった。
・英文の意味が、少し分かるようになった。
・基本的な英文なら理解できるようになった。
・英文の暗唱ができるようになった。
・スピーチができてよかった。
・分からないことが分かるようになって楽しかった。
・授業への取り組み方、ノートの取り方が分かった。
・少しでも英語を使える大人になりたい。
・英語はやっぱり必要なんだなと思った。
・だんだん難しいことにも頑張れるようになった。
・一生懸命勉強すれば苦手や嫌いが克服できる。

齋藤先生は授業を、英語の「学力」だけでなく、「学び方」を学ぶ時間だと位置づけています。そのことが生徒の言葉でも裏付けられています。学ぶことが「生きるちから」になるのです。

（昨年度「太フレ生の英語力プロジェクト」クラス内レセプションの様子＝お互いの英文を読みあって「いいね！」のシール）

☆★定時制高校訪問記★☆

大栗　健二（新英語教育研究会会員・元中学校教師）

☆★数年前に埼玉県の夜間の定時制の授業を見せていただいたことがあったが、昼間部の授業を見るのは初めてだったので、とても興味を持って参観しました。★☆

挨拶の後、生徒一人ひとりを呼名し出席を取りましたが、公立中学校で出席を取るのは朝の学活の時に担任がするくらいなので、とても新鮮に感じました。またこの時間に欠席の生徒のことを話題にしたり、何か情報がないかと尋ねたり、心の通うコミュニケーションが見られました。出席生徒は 17 名でそのうち外国籍の生徒が数名いて、何か外国の教室のような錯覚を覚えました。

生徒の座る座席は決まってないため、毎回座席が変わることも驚きでした。そしてその決定権を握っているのが女子生徒というのも、何か微笑ましく感じました。

授業が始まると立ち歩いたりする生徒は一人もいませんでしたが、机に伏せてしまう生徒やボーッとしている生徒が数名いる中で、教室のあちこちには楽しいお喋りの花が咲いていて、正直驚きました。

でもしばらくすると、顔を伏せていた生徒が急に顔を上げ出したり、後ろの生徒とお喋りをしていた生徒が、「えっ、何ですか」と急に先生の話に加わってきたりするなど、生徒たちは自分のできるペースで授業に参加しているのだなぁと思いました。

そんなバラバラな生徒たちが急に私語を止め、一斉に先生の指示に従い集中して授業に参加したときがありました。教科書を先生の後に続いて朗読するときでした。また朗読の声も思ったよりも良く出ていて、２回目にはさらに大きくなるなど、とても不思議にそして新鮮に感じました。いろいろ考えてみたのですが、恐らく生徒は英語の声をみんなで出すことが好きなのではないでしょうか。そして安心して声が出せる環境があり、そこから生まれる連帯感・一体感（もちろん齋藤先生を含めて）のようなものを楽しんでいるのでは、などと思いました。私が現役で教えていたとき、大きな声が教室に響いたとき、大げさですが魂が共鳴をするような感じを覚えて、私はたまらなくなりました。

朗読が終わり、ホワイトボードを使って先生の解説が始まりました。やがてノートを取る時間になったとき、どこからか歌声が聞こえてきました。何とそれは「君が代」。なかなか集中が持続しません。

それから再び英語を読む時間になったとき、この「君が代」女子が急に、「先生、あのさ、あのさ・・・」と先生を遮るように言うのです。恐らくこれはこの生徒の得意技なのでしょう。すると先生も慣れたもので、「あのさ、今これ読もうと思っていたんだよ。あのさって言われるとそっちに話が振られちゃうからさ、ちょっとこっちについてて。それとも今話したい？３，２，１どうぞ」。ブラジル国籍のこの生徒はこう言いました。「先生、ブラジルのゴール見ましたか。」「ああ残念、見ていない。はい、じゃあこっちね。」

この生徒は途中にトイレに行き、戻ってきてから、「先生、先生の声でかすぎるよ。隣の教室が迷惑だよ。」

あとで、この生徒に聞いてみました。「君が代、どこで覚えたの？」「中学校の卒業式」。うーん、なるほど。

生徒一人ひとりの声を丁寧に取り上げながら、いつも明るく平和なトーンを教室につくり生徒たちが安心して生活できる場として授業に参加できる生徒は幸せ者だと思いました。そんな理一郎先生を生徒たちはみな大好きです。昼休みに他のクラスの生徒が言っていたことがとても印象的でした。「私も齋藤先生の授業を受けてみたかった！」

取材を終えて

猛暑の中、快く取材を受け入れて下さった太田フレックス高校の教職員の方々、授業を見学させていただいた齋藤理一郎先生と生徒のみなさんに感謝いたします。

（取材・文責、写真提供：瀧口典子、大栗健二、加藤彰男）